◎実習報告・小学校◎

平成29年度　小学校教育実習報告

小学校教育実習担当　初等教育科　尾濱　邦子・吉村　壮明

平成29年度の小学校教育実習は、別府市内の小学校での実習であった（公立小学校13校・私立小学校１校）。別府市内の小学校の内諾業務については、例年の流れを踏襲しつつも、今後の小学校実習人数希望の増加予想に伴い、別府市教育委員会への承認および各小学校への承認を得ている。「小学校実習指導」に関しては、現場での実習を念頭に指導を実施している（実習後には各学校への「実習アンケート」実施）。また、小学校実習指導において次年度より分冊となる「学外実習ガイドブック（小学校・介護等体験実習編）」の編集作業を実施した。「実習担当者会議」においては、ほぼ毎月、小学校実習担当者（平成29年度担当）が運営・進行（全11回）を担当し、小学校実習のみならず各実習との共通事項の確認や調整を深めた。小学校実習指導は、各学校への実習依頼調整から受け入れ後、現場を念頭においた実習指導、実習（三週間）となるが、今後の実習希望増加に伴い、実習先確保および内諾・配置業務など、本学の教育実習について別府市教育委員会および小学校に理解を求めていくことが益々、重要になってくると思われる。

＊

１．学生数　　初等教育科　　25名

２．実習先　　別府市内小学校　13校

（境川小・南立石小・亀川小・朝日小・石垣小・春木川小・上人小、鶴見小・緑丘小・大平山小・山の手小・南小・別府中央小）

明星小学校

３．実習期間　　教育実習：平成29年10月２日～21日（三週間）

４．教育実習の意義・目的

これまで大学で学んできた事を、小学校の教育現場で経験豊かな先生方の指導のもとに、児童と直に接する具体的な活動を通して理解するとともに、実践的な指導力の基礎を身に付けるものである。同時に、児童や先生方とのふれ合いの中で、教育の営みを具体的に学び、そこで得た課題を大学で研究することにより、教育者としての識見や教育観を養うことを意義および目的としている。

５．教育実習校の様子

小学校実習担当者が各実習校を訪問し、学校長に実習生の様子を聞き、さらに実習生本人からも取り組みや実習の現状について聞き取りをした。また、訪問時には時間の許す限りにおいて、実習生の研究事業・査定授業に参加するようにしている。

６．教育実習を担当して

大学の講義・演習を通し、教育現場で学ぶ実習は大変、貴重な体験である。特に指導案作成や研究授業の取り組みを通し、教師という仕事の大変さと同時に魅力を再発見する体験となった。

子どもの主体性を大切にする

初等教育科２年　尾﨑　朱音

私が担当させていただいたクラスの児童は、みんなが優しい心を持っていて、自主的に行動することができ、悪いことは悪いと友達同士でも言える、本当に相手のことを考えられる子達でした。ここでは、私が実習中に感動した出来事を紹介したいと思います。一つは、宿泊体験学習でグループ活動をするための、班と班長を決める時間でのことです。まずは班長決めでした。班長になりたい人が黒板に自分のネームプレートを貼り、顔を伏せて一人三回いいなと思った人に手を挙げるという決め方でした。三十人中十五人、クラスの半数が班長になりたいと立候補したことに驚きました。私が小学生の時は好きな人とグループを組んでから班長を決めていたし、班長の決め方はじゃんけんで負けた人がやる、というのがほとんどで自分からやりたいという人は少なかったからです。班長が決定したら、次は班決めです。担任の先生がまとめることもありますが、基本的には児童が自分たちで進めていきます。「班長さんはどの子と頑張りたい？」と先生が声をかけると、すかさず「〇〇君！」「〇〇ちゃん！」と答え、班長でない児童からも「僕・私〇〇さんの班で頑張りたい！」という声が聞こえてきました。また、誰がどの班に入っても「やったー」という声が上がり、班決めで困ったことがあればすぐに「僕・私がかわってもいいよ」と言える場面が見受けられました。仲のよい友達と同じグループになりたいという気持ちも強いが、自分の都合を優先するのではなく、頑張りたいという気持ちで行動できるのは本当にすごいことだなと思いました。また、「自分がどの班になるかが決まれば終わり、好きなことをしよう」という子はおらず、全員が決まるまでクラスみんなで考えている姿にも感心しました。班決めをくじ引きなどで決めてしまわずに先生と児童全員が一緒になって真剣に考えることで、児童がグループ活動を協力して最後まで意欲的に取り組めるようにといった担任のねらいが感じられました。このクラスは元々仲がよいため、誰と誰が一緒になると悪ふざけする、喧嘩してしまう、〇〇さんは〇〇さんと一緒にいた方が自分の力を発揮できる、といったことを互いに把握しており、それをきちんと相手に伝えることができます。だからこそこのような方法で班決めをすることができるし、こうすることによってさらにお互いを知ることができると思いました。そして、こういった活動はもっとクラスが仲良くなれるいい機会であると学ぶことができました。二つ目は、給食の時間での出来事です。一人の児童がおかずの入った大きな容器を倒してしまいました。すると、すぐに何人もの子が寄ってきて「ペーパー持ってきて」「こっちに貸して」「雑巾で拭いた方がよくない？」「この雑巾使いな」と口々に言い、その状況を無視する子はいませんでした。おかずをこぼしてしまった子は、自分は悪いことをしたと思っているのか、黙り込んで申し訳なさそうに床を拭いていました。その時、隣に寄ってきた子の一人が「〇〇君、大丈夫。〇〇君は何も悪くないよ。誰にでも失敗はあるから。」と優しく声をかけている様子が見られました。失敗を責めるのではなく、励ましている姿を見てとても心が温かくなりました。こんな素敵な関係が築けているクラスが、自分にもできたらいいなと思った瞬間でした。これを実現させるためには担任の力が必要です。教師がしっかりとした目標を持ち、その目標を達成させるためにはどのように指導していけばよいのか、児童とはどのように接していかなければならないのかを考え、真剣に児童と向き合うからこそ確かな関係が築けるのだと感じました。そして、この三週間の実習は私

にとって素晴らしい経験と素敵な思い出ができたと心から思っています。この実習で学んだことを精一杯生かしていけるよう、そしてここで見つけた理想の先生になれるように頑張ろうと思います。

教師としての役割について

初等教育科２年　佐藤　亜妃

最初で最後の小学校実習はあっという間に終わった。日々、違った反応を見せてくれる子どもたちとの関わりの中で、自分自身が成長させられることが多かった。

学習面では、教師の声かけがとても重要であることを強く感じた。授業の参観だけでなく、休憩時間や個別指導での参観の子どもの反応を見たり、子どもの考えを直接聞いたりする中で、子どもたちは私が思っている以上に教師の言葉かけ、行動を見ており、学校生活全体を含めて、話しやすい先生、わかりやすい先生、話しにくい先生、わかりにくい先生に分かれていくことが分かった。また、子どもたちが主体的に学ぶために、直接的に教えるのではなく、間接的に教え、どういう方法を使えば答えに辿りつくことができるかを導けるような声かけが重要であることが分かった。授業では考えることに重点を置いているが、集会などで話を聞くときは考えるより記憶することに重点を置いていた。そのため、集会後のクラスでの振り返りの時間がとても大切で「話を聞いて覚える→教室で振り返り、教師が問いかける→子どもが考えて発表する」という、インプット、アウトプットのサイクルをつくる声かけが必要であると学んだ。日常生活で教師が子どもに問いかけ、考えるよう促していると、子どもにも影響していく。授業内で、練習問題をはやくと着終わった子どもには、ミニ先生としてまだ終わってない子に教える時間を設けている。その際、普段から教師が問いかけているクラスでは、答えを教えて終わりではなく、「ここは○○だから次はどうなる？」といった、問いかけの方法で教えていた。子どもたちの鏡になれるよう、朝、子どもたちが登校してきたときから、下校するまでの全ての時間において、言葉選びに気をつけて声かけできるよう、心がけていきたい。

生活面では、子どもたちのどこまで入り込めば良いのか分からなかった。子どもたちの間で問題が起きて、私に相談してきた際に、的確に子どもが望むような対応ができず、話を聞いてあげることだけが主になっていた。担任の先生は、子どもたちに問題やいざこざが起きた際、対象となる子どもを呼び、話を聞くとともに、子どもの意見を発するように促し、話し合いをさせていた。子どもがどういう想いでどういう対応を望んでいるのか、なぜ起きたのか、原因や要因、子どもの考えをしっかりと理解することが大切であると感じた。そして、スモールステップで一つずつ問題を整理し、解決していくことお重要である。また、子どもたちの考えを理解するためには、子ども一人一人の個性を知り、どういう考え、状況が考えられるかを把握しておく必要がある。子どもたちの気持ちを理解、受容し、声かけを行うことで、子どもたちも相手の言葉や教師の言葉を受け止めやすくなると思った。日常生活でいつも子どもたちを理解することを心がけていきたい。

実習の３週間を通して、学習面でも生活面でも教師の子どもたちの理解と声かけがとても重要であることを学んだ。挨拶１つでも笑顔で元気よく声をかけるのと、とりあえず言うような挨拶とでは子どもの反応も感じる気持ちも変わってくる。当たり前のことではあるが、教師の自覚をもち、子どもたち一人一人のことを理解した上で、どのような声かけがその子にとっ

て大切であるか、教師としてどのような行動を行うことが大切であるかを考えていきたいと思った。この当たり前のことが、実習での経験をこれから教える立場になろうと考える私にとって一番身につけるべき力である。

小学校実習を振り返って

初等教育科２年　黒川　　縁

私は全体的反省と学んだことを振り返りたいと思います。反省はとてもたくさんありますが、言葉づかい、ボーッとしてしまったこと、教材研究が不十分だったことが特に反省することだと思います。言葉づかいは、最初のうちは気を付けて話をしていても段々慣れていくうちに雑な言い方や話し方になってしまっていました。授業をさせていただいたときもそうでした。最初は緊張してがちがちで話をしていたのに、子どもたちがたくさん手を挙げてくれることがとてもうれしくて、つい雑な話し方になってしまっていました。先生というものは、いつどんな時も子どもの見本とならなければいけない存在であるのに、お世辞にも見本とは言えないような言葉づかいをしてしまったことをとても反省しています。また、給食後の授業は、どうしても眠たくなってしまい、ボーッとしてしまうことがありました。子どもたちも眠たいはずなのに一生懸命授業を聞いているそばでボーッとすることは、先生にも子どもたちにも失礼なことをしてしまい反省しています。せっかくいただいた貴重な時間を無駄にしてしまったことも反省しています。そして、教材研究が十分ではなく、教科書がなぜそのような例文を使用したのかなどの意図がつかめておらず、私たち目線の例文を作ってしまったこと、十分に研究していなかったため、発表をしてくれたが間違ったしまった子どもへのフォローがうまくできずに流してしまうという実態を招いてしまいました。間違えた子どもへのフォローはもっとも大切なことであると教頭先生に教えていただきました。授業は間違えてよいものであること、何を言っても先生が全部さばいてあげるということを教えていただきました。私がフォローできなかったのは、いろいろなことが不足しているからであり、十分すぎるくらいに教材研究をするべきだったと反省しています。

学んだことは、教師という仕事は日々勉強であるということです。板書をするにしてもどのように書いたら子どもたちがわかりやすいか、綺麗なノートの取り方を学ぶことができるかなどを常に考え、実践していかなければなりません。また、どのような言い方や説明をしたらわかりやすく伝わって行動に移してくれるのか、答えやすい聞き方をするにはどのように聞くのが一番なのかということ、どのような配慮や手立てをしたら学力向上につなげることができるのか、どのように周りの環境を整えたら楽しく学校生活を送ることができるかなども常に考えながら毎日過ごされていることを学びました。また、教えるという仕事以外にも先生方にはたくさん仕事があるということも学びました。どのようにしたら学級をうまく経営することができるかを考えたり、学年･学級通信を書いたり、遠足について考えたりなど本当にたくさんの仕事があることを実感しました。勤務時間が決まっていてもその通りにはいかないし、研究会や研修などで出張もたくさんあります。プリントの丸付けなどは家に持ち帰ってされている先生方も少なくないです。休憩時間も次の授業の準備などで休む暇なく働いています。先生という立場に立たせていただいて、小学生のころは何気なく学校生活を送っていましたが本当にたくさんの先生方に支えられていたんだということを学ぶことができました。そして、様々な子

どもに出会うことができる教師という仕事の面白さも学ぶことができました。よくしゃべる子やものすごくよく周りを見ている子がいるし、大人みたいに固定概念にとらわれていないためいろいろな角度から物事をみて考えることができるため、大人が気づかされるようなことがたくさんあったり、予想外なことをしたり、毎日何かが起こるからです。以上のことが私が教育実習を振り返って反省したことと学んだことです。